

『アジアにおける一個人 ——ピエール・パシェの作品を読む』 へのイントロダクション

根 本 美作子

今日はシンポジウム「アジアにおける一個人——ピエール・パシェの作品を読む」に、本当に大勢来てくださって、ありがとうございます。

まず最初に本学フランス文学専攻、また、明治大学人文科学研究所総合研究「現象学の異境的展開」メンバーである合田正人さん、志野好伸さんに、本シンポジウムにご助力を賜ったことをお礼申し上げたいと思います（今日はおふたりとも来てくださっています）。

ただ、今日の集まりを本当の意味で指揮してくれているのはギョーム・ペリエさんです。昨年6月にピエール・パシェが亡くなった直後、ピエールを追悼して明治で何か企画したらと電話で提案してくれたのはギョームでした。そんなこと、わたしひとりではきっと思いつかなかったと思います。ギョームなしには、このシンポジウムはなかったといえます。

ギョームには最初からよくわかっていたのですが、ピエール・パシェに関するイベントを明治で、というところが肝心でした。明治では10年前、ピエールを迎えて、本当に感動的な講演をしてもらいました。ご記憶の方もきっとたくさんいらっしゃると思います。タイトルは「死者を語る、死者に語りかける」でした。

ピエールはもういません。これからわたしたちはピエールを語ります。そうして、もしかしたらピエールに語りかけるための言葉が見つかるかもしれません。

その意味で、このシンポジウムはあまり学術的にはならないかもしれませんが。「抽象的」なシンポジウムにはならないだろう、ということです。そう

ではなくて、現実に根ざしたシンポジウムです。現実の人たちが集まって、現実に根ざした感情を伝えるのです。発表者はだいたいがピエールの友人とか元学生だった人たちです。ピエールに友情を感じて、今日ここに集まっています。

ピエール・パシェは大学人、作家、知識人として、たぐいまれな知性と、眼を見張るほどの教養を持った人でしたが、それよりも何よりも、まずピエール・パシェというひとりの個人でした。けっこう気むずかしいところもあったけれど、例外的な存在だったことは間違いないし、ひとりの個人、わたしやあなたと同じ個人でした。

ピエール自身がこう書いています。「わたしにとって、一個の作品を築いていこうという気持ちになるテーマが何かひとつあるとしたら、「個人」だろうと思う。この言葉でわたしが名指すのは、自分がそうあるところの者としてあるという、人に課せられた義務のことだ」(『クリティック』誌)。

ピエール、すごくまいけど、この「自分がそうあるところの者であるという、人に課せられた義務」って何？ 個人としてあるって、具体的にはどうということ？ 今から、わたしなりにこの問いに取り組んでみたいと思います。ピエールみたいにうまくは言えないでしょうけど、まあしょうがない。個人というのは、自分の身体、生きている身体というリアリティを持った存在・自分の身体を尺度にして時間を測る存在のことです。成長し、保護を必要としている身体、衰弱し、老いていく身体。時間をマークしながらも、それと並行して、子ども時代から少しずつ、自分の真ん中にひとつの空間を築いていく身体。内にある空間、ひとつの内面性を築いていく身体。[そういう身体をもった存在が、個人です。]

個人というものが持つ、こういう空間的・時間的なリアリティが、ピエール・パシェの作品全体の基礎になっています。パシェの作品は、子ども時代、自分の退屈、眠り、オートマティズム〔＝人が我知らず自動的におこなうさまざまな思考や行為〕、老いること、時差ボケ、自分ひとりだけの愉しみとしてタバコを吸うこと、ハンドルを握るドライバーが、夜ひとりで、自分の気に入った音楽を流しながら車を走らせるときに覚える自由の感覚を取り上げています。

ピエール・パシェの思考はいつも必ず、自分が個人として生きたこと、そのリアリティに根ざしています。パシェ作品は(いちばん学術的な論考であっても)みな自伝的ですが、その力は、すべてこの〔ように、個人としてのリ

アリティに根ざしている〕ことから来ています。

ただ、注意したいのは、ピエールの「自伝」は、非常に特殊な自伝だということです。ピエール・パシェは、自分自身の特殊性というものを認めてはいたのですが、それはあくまで、ひとつのリアリティ、それぞれの個人に固有なリアリティとしてでした。彼が個人の特殊性として感じるもの、これは彼にとって、少なくとも著作のなかでは、あくまで踏み台の役割しか持っていませんでした。これを出発点として、もうひとりの個人へ、あるいは他の複数の個人に向けて、跳躍がなされるのです。

『一対一』、『誰か』、『どこにでもいる人』。こういうパシェ作品のタイトルが示しているように、個人はお互いに平等であって、お互いに交換できる。つまり個人というものには平等＝交換可能性の次元が備わっている。この次元があるからこそ、内なる踏み台から跳躍すること、〔他の個人に向かって〕くると回転していくことができるのです。

〔シンポジウムにあたって〕短い紹介文を書きまして、読んでくださった方もいらっしゃるかもしれません⁽¹⁾。そこで触れたとおり、10年前、ピエー

-
- (1) 紹介文は以下のものである。翻訳は笠間直穂子氏が担当してくださった。
「いまから10年前のこと、東京に滞在したピエールは、日本人と何度か言葉を交わし何度か酒を酌み交わすと、たちまち日本の宿痾を見抜いた——「日本の問題点は、いつも自分が好かれていないと感じてしまうことだ」。この診断で、数十年にわたって抱えてきた日本に対する複雑な思いから私は解放され、いわば私自身に立ち戻ることができた。

『ヤーシでの対話』においてピエール・パシェは、ロシアによる略奪の犠牲となったルーマニア人であるエミネスク図書館の館長との対話について綴るうちに、1944年の春という時期に触れる。1944年の春とは「貴重な瞬間であって、まだ何も確定していない状況、時空間そのものが裏返っていく時ののだ。というのもここで私がなくてはならないのは「1944年の春」という（フランス語だと一種の期待の色合い、一種の地政学的な意味合いをもつ）言葉を回転させること、そればかりか私自身を体ごと、ヨーロッパの空間のなかに違うふう位置づけ直すことなのだから。」

個人であること、という、ピエール・パシェの仕事の主たるテーマは、こうした思考の回転、回転の技量を必要とする。個人であるとは、存分に自由であることによって、自分が占めていた時空間の一点から身を引き離し、もう一人の個人のいる一点に合流しようと試みることができる、ということだ。彼の著作はつねに私たちをこの自由へと、つまり、自分でない者に向けて体と心にくるりと方向転換させることへと導く。自分でない者、すなわち、認知症を発症した老女、失われたベッサラビアの出身であるユダヤ系の父親、ある古代ギリシア人、あるいは精神を無傷に保つことが検閲とともに暮らすという困難な企

ルが日本に来たとき同行していて、強い印象を受けたのが、〈単なる一個人として回転する〉という、この能力でした。

日本人たちと差しつ差されつつ、ほんのちょっと言葉を交わす、ただそれだけの、ほんのわずかな時間でピエールは、たちまち日本人が抱える病を見抜きました。「日本の問題点は、自分が好かれていないと感じてしまうことだ」。

『ヤシでの会話』には、ロシアによる略奪の憂き目に遭ったルーマニア人である、エミネスク図書館の館長が出てきます。この人物との対話を語っていくなかでピエール・パシェは、1944年春のことを喚起します。それは「貴重な瞬間だった。そこではすでに手にしていると言えるものは何ひとつなくて、時空間そのものが裏返る。というのわたしは、「1944年の春」という言葉（フランス語だと一種の期待の色合い、一種の地政学的な価値を持っている）をくるりと回転させなければいけない、そればかりかわたし自身の体全体を、ヨーロッパの空間のなかに、違うふう位置づけ直さなければいけないからだ」。

ピエールに深い痕跡を残した作家をひとり引用します。〔シモーヌ・ヴェイユです。〕この箇所を教えてくれたのは、ピエールの大親友だった作家のパスカル・ローズです。わたしが〈回転すること〉について書いているのを読んで、ヴェイユのテキストを思い出したのです。

シモーヌ・ヴェイユが言うには、神に似て「ひとりひとりの人間は、世界の中心に位置を持っているものと想像している」（『世界の秩序への愛』『シモーヌ・ヴェイユ著作集Ⅳ 神を待ちのぞむ 他』橋本一明・渡辺一民編、春秋社、1967年）。さてしかし、人間は神ではないのだから、この〈中心にいる〉という想像は幻覚です。だからヴェイユはわたしたちに「自分が中心の位置にあるという想像を放棄すること」を促します。「知性ばかりでなく、

てのなかで絶えず危険にさらされている中国の市民や、幻想に彩られているからこそ一層の現実感をもって戦争の凄惨さを語るクルツィオ・マラパルテといった人間に向けて。

このように、自らの身体と精神を絶えず回転させることによって、ピエール・パシェは、生きるという仕事、個人であるという仕事を構築し、その仕事を通じて「自分が自分であることの責務」を果たそうとした。

人々のいづく憎悪や無理解のせいで分断が進むいっぽうに見える今日の世界で、「回転術」の達人たるピエール・パシェの著作を読み、それによって自身を回転させる方法を学ぶことは急務だと思われる。」

魂のなかの、想像をする部分においても、それを放棄すること、それは現実
に「…」目ざめること」だとヴェイユは言います。もちろんここでシモーヌ・
ヴェイユは神の話をしているわけですし、ピエールの書いたものにはないよ
うな、超越論的次元があります。でもピエールは「ヴェイユが説く」『自分
のいつわりの神性を取り除くこと、自分を否定すること、世界の中心にいる
という想像を放棄すること、世界のすべての点が同じように中心で「…」あ
るのをみとめること』に成功していました。

だからこそピエール・パシェの「わたし」は「作品のなかにしばしば見て
取れるように」、〔漠然と「人々」「彼ら」「わたしたち」を指す言葉である〕
〈on〉、あるいは「〔彼〕」〈il〉へと移っていくことができるのです。

こういった回転、こういった移り変わりを行うのは、実はたいへんなこと
です。豊富な知識を、大いなる教養を持っていて、その知識や教養を、他の
人々に対する注意力、彼らのもろさ（それはわたしたち自身のもろさにほか
ならないのですが）に対する、実に強い注意力と結びつける必要があるの
です。

これは三つの点に分けて言い換えることができます。

- 1) ピエール・パシェは国の枠を超えた、大いなる教養の持ち主だった。
そのおかげで彼は、自分と言葉を交している相手の精神がどういう風景
になっているのかを、再現するとは言わないまでも、想像することがで
きた。
- 2) たいへん鋭敏な感受性の持ち主で、その感受性を使って他者のもろさ
を感じ取っていた。
- 3) 自分から離れて、外から自分を観察するという、この実は非常に稀な
能力の持ち主だった。自分自身から、自分自身であるところの中心から
距離をとって、自分自身のもろさに気づく能力を備えていた。

そういうわけでピエール・パシェは、自分自身と対話する能力を持ってい
たのでした。さすがプラトン『国家』の訳者！

この能力、この力を、彼はどうやって手に入れたのでしょうか。持ち主に
とっては、さぞかし疲れる力だろうと思うのですが。

わたしが思うのは彼の戦争体験です。ピエールは1937年に生まれていて、
ある思考から次の思考へ、ある行から次の行へ移っていくとき、この日付に
いつも立ち戻っていました。ピエールにはもうひとつ特徴があって、その基
礎になっている体験です。現在に過去が重なってくる、書きつけられていく

断言が絶えず震えている、言葉ひとつひとつ、思考ひとつひとつを、物陰から不確かさがじっと窺っている。いや実は不確かさというのではなくて、むしろ無関心、ふたたびシモーヌ・ヴェイユの言葉を借りるなら、まさに脱中心化、〈いま〉という時間のリアリティのなかに織り込まれた、不在の性質です。

じっさいピエールは、時間に対して特別な感受性を持っていました。彼が回転するとき、それは空間だけではなく、時間のなかの回転でもあった。ひとりひとり、すべての人が生きるリアリティの材料となっている、あの時間です。

ピエール・パシェは直接戦争に、ショアーに触れたことは一度もありません。戦争の影が、現在に開いたいくつもの穴から沁み出してくる、というほうがよかったのです。そうやって彼は戦争を生きたのです。

歴史に対するわたしの関係にいちばん深くしるしを刻んでいる […] のは、ドイツによる占領期、1940年から1944年であるように思われる。幼年期、沈黙、怖れの年月、[…] わたしが見て取り、考えをめぐらせた数々の事柄の背後に、たぶん姿を見せていた年月。フランスが占領から自由になったとき、サン＝テティエンヌでの1944年は、無秩序な自由へと開けていくような印象をわたしに与え、子どもだったわたしは、いろいろな面で恐ろしかったのだが、このときわたしは、両親や、姉や、わたしがユダヤ人なのだと知り、それが何を意味しうるのが、わたしにとって初めて明らかになった。とくに、直前まで自分がまるで口をきかなかったのだとすれば、それは口をきいてはいけないと言われていたから、わたしたちひとりひとりを、ひとつの危険が脅かしていたからだだったのだと知った […]。ふつうに生き、自分の意識を開け放ち、押し拡げていきなさいということになったそのとき、わたしは過ぎ去った恐怖を発見したのだ。この恐怖は、一度も表に現れなかったから声を持たなかったが、まさにそのゆえに、鎮めることが不可能で、その後一度もわたしを離れることはなかったように思われる（『意識と歴史』『不寝番』）。

いちばん実地的な事柄だけに絞って言えば、戦争を脱して、少しわたしたちの状況が落ち着いたとき、自分がどう名乗るべきなのか、自分の苗字は何なのか、あまりよくわからなかった。わたしたちは名前を変え

ていたの、新しい苗字——本名——を、まるでこのとき発明されたみたいに、覚えなければいけなかったのだ。わたしは自分の住所がわからなかった。自分について知っていることを、外の世界（学校）がわたしについて知っていることと一致させなければいけない、そういうときに、わたしは逆に、このふたつのつながりがしばらくのあいだ脅かされていた、さらには断ち切られていたのだと知った。まるで物事の、社会の安定性のありようがこのつながりを世話してくれるかわりに、わたしが自分で何とかしなければいけないかのような感覚だった。わたしはこのあと続いた何年ものあいだ、長い時間をかけて、沈黙のうちにこのつながりを修復していったように思う。とくに、ほとんど狂信的な、過剰な仕方、わたしとわたしのあいだのつながりが連続的であるよう保証していったのだ。[……] 自分の文章 [……] を読み返していると、この引き続く不安が、ほとんど病的な効果を及ぼしているのがいまでは見てとれる [……]。こういう肥大した意識、自分に割り振られている、警戒心に満ちた明晰さの地帯から溢れ出していこうとし、自らの境界を認めない意識というのは、万人の意識が取りうるかもしれないあり方のひとつに、よく対応しているとわたしは思う。それは、世界が平和であり、個人が保護されていることを保証するものが破壊され、あるいは深刻な疑義に晒されているとき、何が起きるのかを示している（「意識と歴史」）。

「Je」から「il」を通して「on」へ。自我の脱中心化。この絶え間ない運動を、ピエール・パシェの仕事は身を持って示していました。そしてわたしたちは、それを受け継がなくてはなりません。こんにち、個人に対する保護は、ますます脅かされてきているように思われるのですから。

（近藤学訳）